

----- [工業化の波に乗れ] -----

“眠れる巨象”の目覚め

インド——、そう聞いて読者諸氏は何を思い浮かべるだろうか。カレー、象、ガンジス川、タージマハル、ヨガ、「ボリウッド」と呼ばれる映画産業、人によってイメージはさまざまだろうが、工業が真っ先に浮かぶ人はそう多くない。実際、国内総生産（GDP）に占める製造業の比率は約15%とそれほど高くない。しかしインドは、「世界の工場」を目指し工業化の推進に力を入れる。工業の発展に伴い、工作機械の需要も大きく伸びると期待される。“眠れる巨象”と言われた同国はいよいよ目覚めるか。インド市場の最前線を追う。

▶ 人口は「不動の世界一」に

FA産業で大きな注目を集めるインド市場。インドは誰でも知っているメジャーな国の一つだが、ステレオタイプ（固定観念）が先行している国でもある。例えばインドの男性といえば頭にターバンを巻くイメージがあるが、巻いているのは人口のわずか2%のシク教徒だけ。さらにはシク教徒であっても、最近の若者はターバンをあまり巻かないという。ステレオタイプと実態は乖離（かいり）していることも多く、インドの産業についても固定観念にと

インド基本情報	
人口	14億5100万人
面積	328万7000km ²
名目GDP	約3.9兆ドル
行政区画	28の州、8の連邦直轄地（連邦制）
首都	ニューデリー（デリー準州）
言語	公用語：ヒンディー語 準公用語：英語 ※その他州ごとに合計21言語
宗教	ヒンドゥー、イスラム、キリスト、シク、 仏教、ジャイナなど
民族	アーリア系、ドラビダ系、モンゴル系など
主要産業	農業、工業、IT産業

※各種資料を基に編集部作成

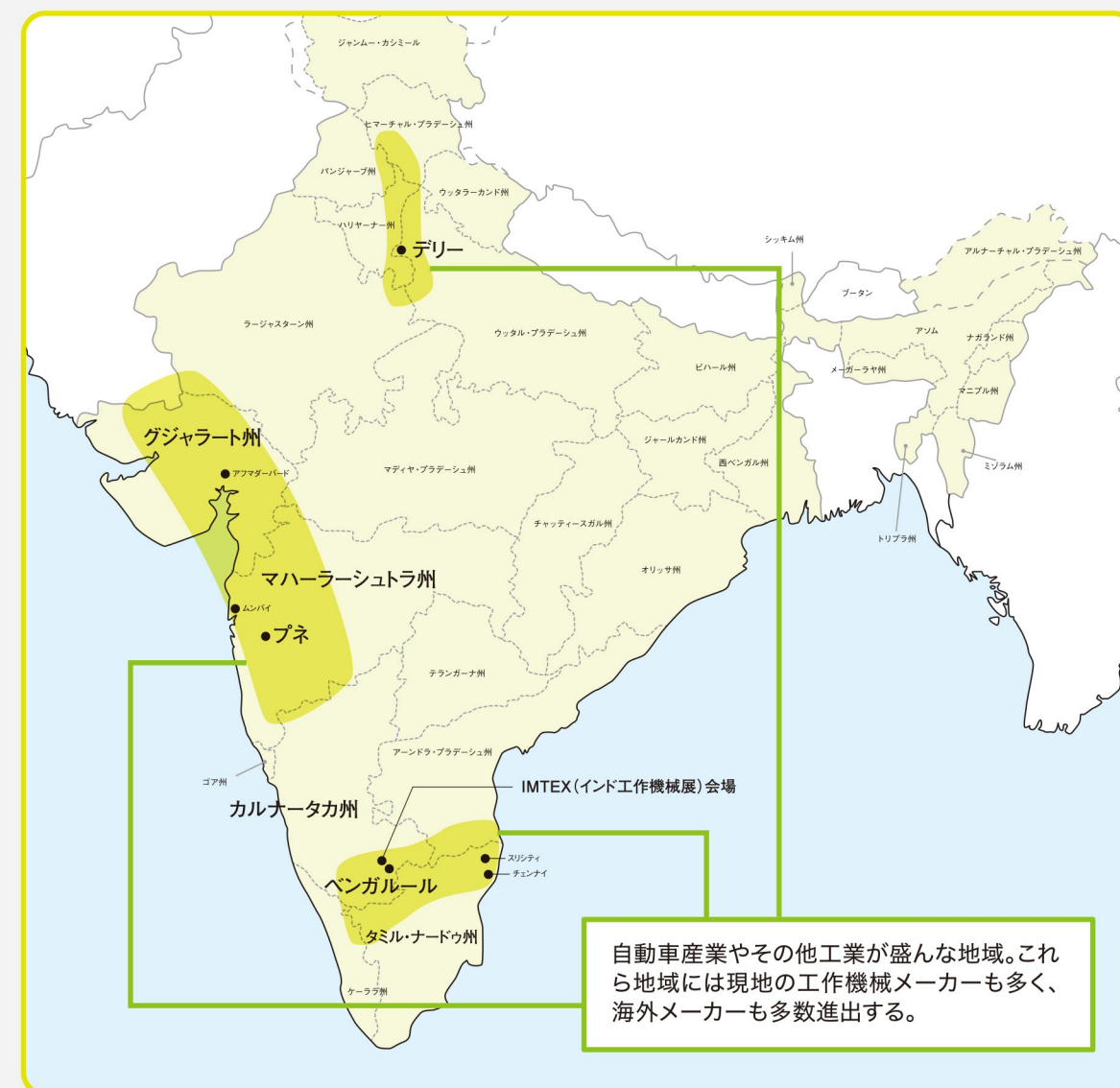
らわれずに見ていく必要があるだろう。

まず、インドの基本情報について確認しておきたい。国土面積は約328万7000km²でブラジルやオーストラリアに次いで世界第7位。連邦制で28の州と8つの連邦直轄地で構成される。公用語はヒンディー語だが、その他に憲法で公認されている州の言語が21言語もある。2011年の国勢調査によると、宗教はヒンドゥー教徒79.8%、イスラム教徒14.2%、キリスト教徒2.3%、シク教徒1.7%、仏教徒0.7%、ジャイナ教徒0.4%で、識字率は73%だった。

同国で特筆すべきは人口だ。国際連合の推計によれば、インドの人口は14億5100万人で、23年に中国を抜き世界一位となった。中国は1979年から2014年まで実施した「一人っ子政策」の影響もあり、少子高齢化が進んで22年以降は人口減少が続く。一方インドは10代の若者が多く、人口は今後も増加して60年ごろには17



多くの自動車で混雑するベンガルール近郊の道路



自動車産業やその他工業が盛んな地域。これら地域には現地の工作機械メーカーも多く、海外メーカーも多数進出する。

億人前後になると予測される。その後はインドも人口が減少局面に入るが、少なくとも2100年ごろまではインドの圧倒的一位が続く見通しだ。

経済力も増しており、インドのGDPは2000年時点では世界13位だったが、22年には5位まで上昇。国際通貨基金（IMF）が発表する「世界経済見通し」によると、27年にはドイツや日本を抜き、米国、中国に次ぐ世界3位になると予測される。人口大国であるだけでなく、経済大国としても確固たる地位を築いている。

▶ 製造業の拡大が国策だが…

同国は農業やIT産業、各種サービス業が盛

んで、経済全体が成長しているが、政府がとりわけ力を入れるのが製造業の振興だ。14年から続くインド人民党を中心としたナレンドラ・モディ政権は「メイク・イン・インディア」を掲げ、製造業の成長を継続的に支援する。GDPの製造業比率を25%まで高めることが目標だ。さまざまな支援策を整え、国内製造企業の振興に加えて外資系企業の工場も積極的に誘致する。日本からも自動車や自動車部品、その他工業製品のメーカーがインドに工場を置くケースが増えている。

工業製品の需要も旺盛で、経済発展に伴い自動車も急速に普及する。インドといえばバイクのイメージが強かったが、近年は4輪の自家用車も増える。自動車の登録台数の増加に対して

インドで生産し世界の市場へ

インド工作機械工業会 ジバク・ダスグプタ専務理事



インドの経済は23年以降、GDP成長率が7%前後で推移しており、世界で最も高い水準で発展している国の一つです。インドは「メイク・イン・インド」政策で、インドや海外の企業がインド国内で製品を製造し、世界に向けて販売することを奨励しています。インド国内で生産された製品の売上高の増加に応じて助成額が増える生産連動型奨励策(PLI)などの制度も用意しています。その結果、工作機械を使用する自動車や航空宇宙、防衛などの産業が発展しています。電子機器や半導体製造、医療機器、再生可能エネルギーなどの分野は今後特に伸びると予想されています。

インドは工作機械の消費が活発であるだけでなく、質の高い労働力や政策上の優遇、低い

法人税、土地の確保のしやすさ、政治的な安定など、日本の製造企業や工作機械メーカーが事業を展開する上でさまざまな利点があります。インド市場の成長率は世界トップクラスで、それだけでなく他のアジア諸国や中東、欧州などにも輸出しやすい位置にあります。

日本の工作機械はその品質や信頼性、精度の高さでインドでも人気があります。日本とインドは双方にとって利益のあるwin-win(ウィンウィン)の関係になれると考えています。

道路整備が追い付いておらず、小誌記者が1月にベンガルールを訪れた際は道路は多数の自動車で混雑していた。

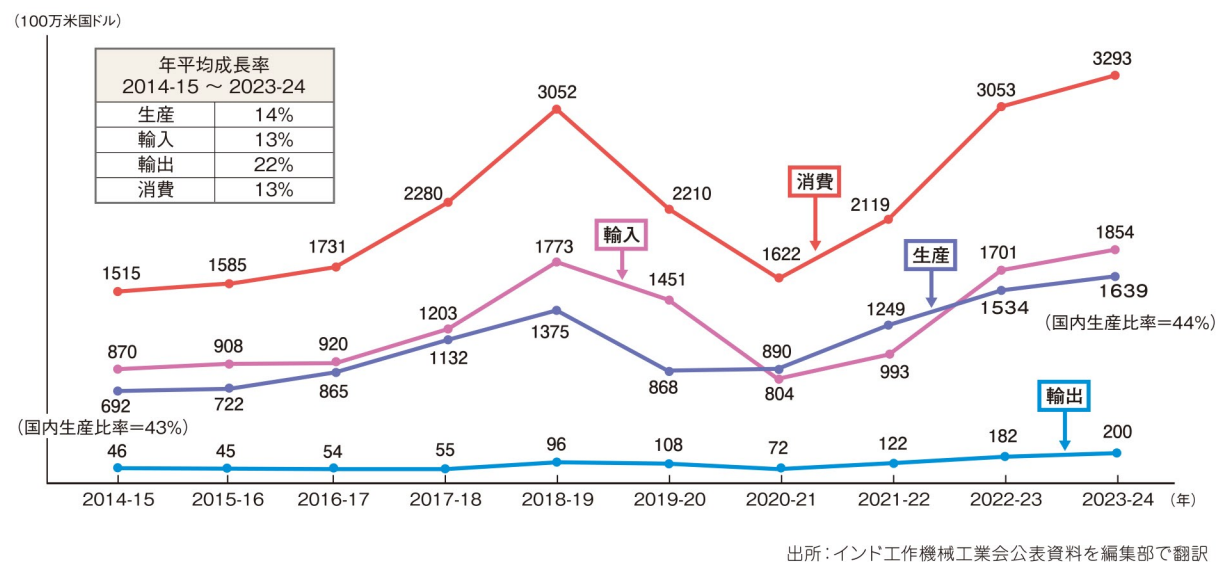
製造業の振興策が充実し、工業製品の需要も伸びてきた。一見順調だが、工業化する上での課題、あるいは障壁もインドには多い。製造業のGDP比率は目標の25%に対して15%程度にとどまり、思ったように上がっていないのが現状だ。中国は1990年代以降に一気に「世界の工場」としての地位を確立したが、インドは苦戦しているといえるだろう。中国とインドでは何が違ったのか。複数の機関がさまざまな分析を発表しており、土地の権利確認が困難であるなど、さまざまな課題が指摘されている。前述したように連邦制であるため州ごとに異なる制度も多く、識字率の低さも工業化を妨げる要因となっている。

工作機械市場はどうだろうか。新型コロナウイルス禍による一時的な下落はあっても、この10年

間の工作機械消費額の年間平均成長率は14%と極めて高い水準を維持している。このまま成長が続けば工作機械の一大市場に成長する日もそう遠くなさそうだ。しかしこちらもあまり楽観視はできない。インド市場の展望について日系FAメーカー幹部にヒアリングすると「いずれは巨大市場に成長するのは間違いない」と誰もが言う。しかし続けて「それはいつ頃だと思いますか?」と聞くと、返答はかなりまちまちだ。今後5年～10年との見方もあれば、もっと何十年かかるとの見方もある。

また、インドは注目を浴びる市場であるだけに、中国や欧州の工作機械メーカーも多数進出する。工作機械市場は伸びているが「それ以上に参入が多く、過当競争が懸念される」(日系工作機械メーカー幹部)との声もある。インド市場の開拓は決して楽な道ではないが、それでも新市場に果敢に挑む企業が多い。

消費額も輸入額も増加傾向 — インド工作機械産業のトレンド —



▶ 中国にとって代われる唯一の国

本特集では、インド市場の攻略に注力する企業の取り組みを紹介する。本項に先行する特集冒頭では、1月23日～29日にインド・ベンガルールで開かれた「IMTEX(インド工作機械展)2025」の展示レポートを掲載した。インド工作機械工業会(IMTMA)のジバク・ダスグプタ専務理事が「記録的な来場者数で大成功だった」と話す通り活気にあふれ、現地有力メーカーや日系も含めた海外メーカーのブースは大いににぎわった。

インタビューはヤマザキマザックの山崎高嗣



ベンガルールでは工業化や経済発展が進む一方、街中には伝統的なチャイ屋も残る

社長。同社は2023年にインド西部のプネに工場を立ち上げ、新規顧客層の開拓にも注力する。またインド南部ベンガルール近郊のブラザー工業の小型マシニングセンタ工場と、同じくインド南部スリシティにあるTHKの直動ガイド工場も紹介する。両社はさまざまな工夫で品質は維持しながら現地生産で短納期化などを図る。また、インドに営業拠点やテクニカルセンターを持つ日系FA企業の取り組みや、元シャープインド社長の磯貝富夫関西日印文化協会副会長による「インドビジネスの“コツ”」なども紹介する。

地政学リスクを考慮し、中国依存からの脱却を考える企業は少なくない。しかし中国は14億人の人口を抱える巨大市場でもあるため、なかなか進められないのが現状だ。中国14億人の市場の代わりになるのは、同じく14億人超の人口を持つインドしかない。「インド市場を制するものが、将来のFA業界を制す」と言ったらあまりにも大げさだろうか。その答えはまだ誰にも分からないため、この特集を読んで各自で判断してほしい。

(曾根勇也)